

1989年夏・国際民衆行事

国際化のなかの管理と人権
—くらし・教育・労働から考える
8/4-6(名古屋)

アジアン・フェスティバル—出会いと交流
8/25-27(福岡)
長崎博覧会・北への橋丁・民衆交遊員本市
西博覧会交流センター・長崎県・福岡県両総合
見本市・コンサート

PP21まとめとひろがりの広場
—結びとる21世紀民衆宣言へ
8/20-24(水原)
ACFOD(発展のためのアジア
文化フォーラム)総会
8/16-18

アジア太平洋反基地会議(5)
—アジアの中の沖縄
沖縄の中のアジア

神奈川県シンポジウム
平和と正義のアジア太平洋をめざして
—軍事・外交・経済
8/17-19(横浜)

アジア労働者連帯会議 アジアの労働者とともに労働
運動の根本的変革に着手する。
8/7-9(東京)
8/12-14(大阪)

百姓国際交流会
百姓として考える、農村から発信する
7/29-8 2(山形県鶴岡)

世界先住民会議
—歴史を担って未来へ向かう
8/7-14(札幌・二風谷・札幌)

食と農といのちの広場
8/3-7(新潟)

稲作経済圏フォーラム'89
8/9-12(香季)
—コメの未来とアジア
太平洋地域を考える

日通連・HCCJ
アジア・太平洋消費者会議
—いま私たちができる新しい世界をつくる
8/18-21(大阪)

民衆文化の祭り
ルック・アジア・ウィークエンド
8/12-13(東京)
コンサート・ダンス・映画・映画・シンボ
ジウム 出演予定：PETA(フィリピン)
映画協会、アボリジニー(オーストラリア)、
スシアター(オーストラリア)、チャンパワ
ンバ(イギリス) ほか日本インテイクス
ト

農業と食べ物を考える国際シンポジウム
8/16(東京)

8-15反戦反核共同行動 8/15(東京)

日本縦断 レポート

●アジアとともに未来をつくる

ピープルズ・プラン21世紀

「なぜピープルズ・プラン21世紀
がもたれたのか」

八〇年代に入って、アジア・太平洋の時代ということがいあん形で行われてきました。しかし実際は、それを推進している主体は、国家であったり、あるいは企業であったりということが一つある。しかし、国家や企業がアジア・太平洋という形で大きく網をかけ、実際に動いていく過程で、人と人との出会いもいろんなレベルで始まっていたのです。

それは、一番顕著には、国内でも、出稼ぎ労働者、あるいはアジア地域からのお嫁さんとか、そういう形で期せずに出会いがありました。ただ企業やお金が

仲介にならなくての人と人との出会いというのは、必ずしもザラスの成果になっていかない。お互いに対等な関係の中に置かれる、お金をもった者の方を強者の立場に置いた、対等でない環境をつくり出してしまっている。それが非常に広範囲に起こっているという認識がまずあって、やはりそこから対等な関係の出会いをしていきたいという意識がありました。

ここでいえば、ピープルとして民衆として出会う。民衆として出会う。いかれる条件が、日本の国内においても、それからアジア・太平洋のそれぞれの国においても、必ずしも熟しているとは思わなければならない、必要とされてきている共通の時代認識は、ほとんど直感的なものといえることなんです。一方、日本をみると、このままじゃだめだと。私たちは、大きな変化の時代、特に八〇年代半ば以降、具体的には、円高に象徴されるような経済的な変化の中で、日本の中で全体として方向性を見失ってどうして

いかわからない、価値観を見失っている状況があるのではないかとみています。そうであれば、アジア・太平洋の人々とともに民衆として出会う中から、私たちの価値観を新たにつくり出すことができるのではないか。いってしまえば、それが今回のピープルズ・プラン21世紀を企画した大きな動機であるし、目的であるんです。

「先住民、労働者、女性問題

など豊富な議題」

音楽コンサートを開いたり踊りをやったり、いろんな文化行事を含めて、非常に幅広い幅で、そしてテーマも、非常に多角的な切り口からやってきました。二八〇人もの、それも三十数カ国という、ほとんど名前も聞いたことのない国々、あるいは地図の上でしかみたことのない国々からやってきた。日本の側からすると地図の上での点でしかなかった国々の人たちが、日本とのかかわり合いを具体的にもってやってきている。そこ

で生身の人間の口からいろんな問題が語られてきたことが、最大の成果だと思われ、その中にいろんな出会いもあったと思います。

行事としては、大きく分けて、先住民たちの出会い。太平洋の島々、それからソ連領のところから、そしてアメリカ領のところから、いわば国境を越えるという、越える必然性——もともと国境は、彼らにとっては外側からつくられたものでしかないという、国境そのものを相対化するような価値観みたいなものが、はつきり出されてきたと思うのです。

もう一つは、そこと連動して、沖縄で基地の問題を議論する場があり、それから山形、新潟、岩手の三つの県で、農家の会議を四―五日ずつやってきた。ご存じのように、今、農業問題というのは、国際的な関係を考えずには農業問題は考えられないという状況になってきている。この三つの県で、これだけ長期にわたって農民会議をやったので、海外の人たちと直接出会った農民の数は非常に膨

大な数にのほりました。山形でも、置賜など六つの地域でやり、新潟でも三つの地域、岩手でも六つぐらいの地域という形で、それぞれの地域で小さな規模の地域交流をやったんです。そうすると、村々の農民たちがタイやフィリピン、台湾、ヨーロッパ、アメリカの農民たちと直接話し合っ、手を握り合う関係がつけられました。この成果は非常に大きいと思います。

それと同時に、この会議そのものを農民自身が準備したということ、お仕着せで海外の人が派遣されて受け入れたという形じゃない。最初から、お金の問題まで含めて農民たち自身が悩み、通訳を準備してきた中で、自分たちが主体となって農業問題を解決するんだということ、それが、確信としてつくられてきたんじゃないかという気がするんです。

農村の中での国際交流というのは、今まで、いわば被害者として、国際化という言葉自体が、相互の農民にとっても、日本の農民にとっても、あるいはアジアやアメリカの農民にとっても、被害者というところを超え切れなかったと思うんです。それを転換して、ともに手を結んだところから、新しい社会をつくっていく主体なんだというのが響きとしてきましたと思います。

今、女の時代といわれているけれども、ここではアジア・フェミニズムをつくり出そうと。つまり欧米型のフェミニズム——フェミニズムという言葉自体が、欧米からやってきたわけですけれども、そうではない、アジアのフェミニズムという言葉を用いて、三〇人を超える女性たちがやってきて、直接合宿をして、一緒に食べ、話し合った。その中で、女の時代であるためには、これからの社会をつくるていくのは女性たちの力であり、そういう意味で、「男」に対する「女」というだけでなく、社会の変革を担うフェミニズムということを基調につくられてきたんじゃないかと思えます。これから女

の人たちが、ここで出会った女の人たちと一緒に、それぞれの国を訪ね、その内容をこれから積み上げていこうとしているんです。

労働者にしても、四〇人を超えるアジアの労働者がやってきた。国際交流というのは、今までも労働運動の中にいろんな形であったわけですけれど、どうして何人かの来賓がやってきて論壇にというようなところがあつたんです。四十何人も労働者が直接やってくると、単なるお客さんとして迎えるんじゃないで、それぞれが組合レベルでも、組合ぐるみで一緒に何かをやっているという、その人たちともにつき合っているという状況が生まれてきました。

具体的な準備や何かにしても、いってみれば主体の力量を超えるような国々のいろんな状況、多様な状況を抱えて、それこそ中国問題にしても、そのことを直接自分たちの問題として考えている国々からやってきて、生身の声が出されてきたときに、単にお客さんとしてのメッ



世界先住民会議
その存在、世界観、生き方が多大な影響を与えた

セージじゃなくて、自分たちの問題だということ、労働者の交流の中から出てきていると思います。

【日本に対する要請】

進出企業の問題が大きな議題となり、出稼ぎ労働者の問題とあわせて、どこでも話題になりました。

今回、こうやっていろんな国際会議を同時に、多発的にやったということは、いろんな切り口、つまり消費者の側からみえてくる日本企業の問題、労働者の側から出てきている問題、それから農民の側からも企業の問題、工業の問題というのがみえるわけです。そういった問題をもう一度すり合わせていこうということが、水俣での課題でした。

全部のところで共通して出てきたのは、政府援助(ODA)の問題です。これは大きな問題ですので、独自にも調査運動として、タイ、フィリピン、インドネシア、日本が共同調査をやってきました。その調査の報告集会和、神奈川県で

ていけというのではなく、五〇〇万の北海道のシャモとアイヌがどうやって共生するかという議論は、まだこれからだと思えます。

先住民会議というのは、今までずっとどこでも先住民だけでやるというのが慣例となっているわけです。非先住民の間というのは、いつもオブザーバーか、そうでなければ、一緒に活動しつつも、先住民だけの会議を尊重してきたという経過があります。今回は、先住民だけの会議と同時に、侵略者としてのシャモと、ほかの人間が何を考えるかということ、で、二つの分科会ができました。それが根源的な平等観で共生できるような、日常的な活動をどうするかは、今度の先住民会議で一つ芽を開いたけれども、今後どう展開していくかが問題として残されています。

また沖縄の場合、基地という共通の問題を抱えているということで、これはほとんど太平洋の島々の先住民の人たちが沖縄へ行ったんですけど、基地の問題と、

やった「平和と正義のアジア太平洋をめざして」というシンポジウムの中でも、中心的な大きな議題として取り上げました。その際、今のような援助はいらないということが、それぞれの受け入れ国の側から、民衆組織の側からはつきり出されました。

【先住民問題への認識】

今回の行事全体を貫いて、先住民の存在、その世界観、生き方は大きな影響を及ぼしたと思います。

昨年四月に、ピールズ・プラン全体の共催団体になりましたACFODという組織が主催して、アジア・太平洋の先住民たちの出合いの場をオーストラリアでもちました。

オーストラリアの場合も、先住民であるアボリジニーの人口は、全体の1%しかない。そのアボリジニーの人たちが、今、自分たちの住む土地の権利から、自分たちの文化ということで、決してその居住区だけではなくて、大都市の中でも

生きていく権利ということを、一体いつのまに、太平洋の島々としてともに生きていくということと、それを阻んでいる基地ということとを、裏表の一つのこととしてとらえていく。基地の存在が共通の問題なんだけど、単に政治的な課題であるだけでなくて、自分たちがともに生きていくことを阻む存在であるものとしてとられてきたということが出されてきた方向だし、それが一緒に出会ったことの中から生まれてきたことだと思えます。

単なる言葉としてだけではなくて、実感としてそのことが人々の間に伝わっていったというのが、一つの成果ではないかなと思います。

観光開発の問題、基地の問題は、島の人々、住民たちの権利が侵害され、一方で経済的な観光開発が進みながら、しかし住民たちの生活権はほとんど侵害されていっている問題など、驚くほどに太平洋の島々に共通の問題なわけです。共通の問題だという認識とともに、どうしてそういう問題が共通に生まれてきている

さまざまな活動を展開しています。去年、オーストラリアは二〇〇年祭ということ、その中でアボリジニーは、「白いオーストラリアには黒い歴史があるんだ」ということを一つの統一のスローガンにした。非常に多角的なキャンペーンで、自分たちの存在を知らせるだけではなくて、もう一回歴史観から全部変えさせていく。

アイヌの問題も、日本の一国の中での問題としてとらえているだけではきつい問題であったと思います。アジア・太平洋の中で、多数か少数かといったら、みんな圧倒的に少数者なわけだけでも、歴史と歴史をつくってきた先住民としての誇りをもっている。釧路の先住民会議は日本でも初めてだったわけですが、ただ単に世界の人たちをお呼びするだけではなくて、その中でアイヌの誇りでありアイヌの問題をもう一回世界の仲間が来る中で突きつけていこうというのが、最初の動機だったのではないかと思います。

先住民会議での議論は、和人は全部出

のかということも、共同になることによつてその構造がはつきりみえてくることがあるのではないかと思うのです。

【農業、労働者、女性問題】

世界の農民たちは自由貿易に反対していくということが共同の宣言にはつきりうたわれ、これからそれを具体的にしていこうとしています。これは消費者会議の方でもそのことは問題になりました。

農民会議に出席した一部の農民たちが消費者会議にも出ていったんです。というのは、消費者の立場からすれば、安い食べ物になる傾向もあって、ヨーロッパではそういう傾向が出てきているが、そうではなくて、いわば地域としての自立、そして安全な食べ物、あるいは農業が自然と共存していく中では、自由貿易は方向が違うのではないかということが、農民会議ではつきり出され、そのことが消費者会議の中にも持ち込まれていったと思います。

その中で、自由貿易に反対するという

方向を支えていくポジティブな側面というか、その基礎は何なのかというのは、自然とともにということと、そして家族経営を基盤にしていくということです。問題の出方が、例えば、いわゆる第一世界と第三世界では非常に違うんだけれども、それが裏表の関係の中にあつて、共通の根っこがあるんだということが発見されてきていると思います。

また、もう一つ、花嫁問題も今の農業をめぐる問題として意識されています。

今までだと、農村の側からは、お嫁さんをよこせという声しか出てないし、女性の側からすれば、農村の封建制の問題としてしか出されていない。その声のすれ違いだと、ともにつくっていくというところにはいかないから、それをもう一回、そうではなくて、地域のコミュニティに基盤を置いて、ともにつくっていくための方向から、その問題をどうとらえるかという議論はまだこれからだと思うんですけども、その契機にはなっていないと思います。

【今後の課題と展望】

数多くの人たちがともに出会った中で、今までは地図の上の点でしかなかったところに、具体的に、あの人がいて、こういう背景をもって、こういう運動を続けているんだと、お互いに実感としてもてるということが、未来に向けてのとりあえずの出発点。そこで共通したいろんな問題が裏表の側から——今までだつたら、どうしても企業を媒介としたところ、それによってやられてきた、共に生きる仲間としてみえていくことが、未来への出発点ではないかと思えます。地域で運動をつづけてきた人びとが蓄えてきた力と国際的な民衆としての出会いの中で日本をどう変えるかが、私たちの一番最初の目的だったわけですが、日本を変えるためだけでは、海外からこれだけの参加者がなかつたと思えます。ただ、日本を変えないとその共生もできないという、今のアジア・太平洋地域の状況の中で日本に対して物をいい、私たち

日本人の呼びかけにどう答えるかということ、今回、国際的な民衆団体が、一五共催団体としてともに担ってくれた。そこに非常に大きな支持があつたと思うんです。それでなし得たのではないかと思います。

今後国際的なPRをやるにしても、もう一回私たちは日本の現場に返つて、このPP21をやつてアジア・太平洋の人と出会えてみえた日本、足りなかつた議論、まだまだつながれてなかつた日本の中でのいろんな人々と、水俣宣言という大きな未来を語つた宣言をもって、どれだけの議論の蓄積が日本の中でできるのか。

その共生に向けての議論をアジア・太平洋の中でも、私たちの民衆ネットワークを継続する具体的な行動や、具体的な議論を通して、模索していきたいと思つています。

(レポーター・井上礼子、大橋成子「アジア太平洋資料センター」)

PP21

アジアの現状と未来

—水俣の地から命ある人間たちの訴え

谷 洋一
(アジアと水俣を
結ぶ会々員)

それは命ある人間達の切々たる訴えの中から始まつていった。「ピトブルズ・プラン二十一世紀、水俣の集い」は八月十九日水俣からの訴えと叫びに耳を、心を傾けた後、二十日アジア・太平洋の友

人達からの人と自然の共生へ、新しい世界を築くための、新しい人間へのよみがえりを語りついで。マレーシア・サバの農民ルシア・トバは、住民の命である熱帯雨林破壊の現場から涙ながらに訴え

の国から、私達が最も大切にしている私たちの命の森を奪いつくそうとするのかと、奪いとる国・日本の本質を鋭く告発した。

●生かされないポパールの教訓

インドのジャーナリスト、アルン・スブラマニアンが叫ぶ。一九八四年十二月、インド・ポパールで多国籍企業ユニオン・カーバイトによつて三千人余が殺された教訓は何一つ生かされないまま、第三世界の工業化は進行していることを。

近代工業文明がいかに第三世界の人々の多くの犠牲の上になりたつてくるか、そして、開発と産業化が一部の人々にのみ経済的利益をもたらすのみで、圧倒的多数の人々に貧困と犠牲をますます強いていくことが明らかになった今日、近代文明を根底から問い直さなくてはならないことを。そしてその、最も苛烈な犠牲者たる水俣やポパールの被害者がその告発の闘いと世界的連帯の輪をつくりだせるよう協力していこうと訴えた。



次に、カナダ先住民のエド・バインズ
ティックは、祈るように切々と語りはじ
める。

● 侵略と迫害の歴史

一四九二年、世界の歴史はコロンブス
がアメリカ大陸を発見した年として記録
されている。

しかし私達、先住民はそのずっと以前
からそこに平和に暮らしていたのだ。そ
れはまぎれもなき侵略の始まりの年であ
り、この五百年は大地と共に生きてきた
人々を殺し、自然を破壊してきた五百年
であることを明らかにせねばならない。
日本のアイヌや世界の先住民にとって侵
略と迫害のこの歴史を問い直し、真実の
歴史を世界の人々に知らしめねばならな
い。そして略奪と破壊の侵略者の文化を
今こそ問い直さなくてはいけない。人間
は自然の中に生かされているのだという
ことを忘れて、大地を切り裂き、破壊を
続けることは滅亡への道以外の何もので
もないことを人々は知らねばならないと

語り続けた。

南太平洋の小さな島、トンガからはる
ばる海を越えて来たロペティ・セニトゥ
リは、差別され、土地を奪われた悲しい
物語の中にある、限りなき民族の涙を押
し殺すかのように激しく、しかし静かに、
語りはじめる。侵略者によって生きるた
めの闘いを三百年にわたって押しつぶさ
れてきた歴史を、創造主から与えられた
海と大地と共に生きてきた故に、最も蹂
躪されてきた人々の苦しみを、そして核
実験場とされ、核のゴミ捨て場とされて
いる南太平洋の海と島々のことを、その
中で次々と巻きおこっている非核、独立
の闘いを、そして米国の肩代わりをしな
がら支配権を拡げていく日本の犯罪性を
通して、日本の変革が鋭く問いかけれ
ている。人々は限りなく血を流しながら
闘い続けているのだと。

最後にインドのフェミニスト、カム
ラ・バシンが歌う、連帯の歌を、共通の
未来を共有しあう歌を。男中心の開発が
いかに戦争と不平等を生み、女性の眼を

とおしてしか見れない、語れない、いび
つな世界をつくりだしたかを。そして、
真の平等や、解放は四つのA(Poverty(貧
困) Position(売春) Patriarchy(家
父長制) Pollution(公害))との闘いな
くして勝ちとれないことを説得力ある、
力強い語り口で語る。それは水俣やポ
パールを二度くり返さない新しい社会を
築きうる、新しい人間を私達が生みだし
ていかななくてはならないことを。

アジアからの熱い風

この夏、日本列島を吹きぬけたアジア
からの熱い風、「ピープルズ・プラン二
十一世紀」は、水俣での集約会議をへて、
希望の連合への一步を踏みだした。それ
は、小さな一歩である。しかし、それは、
後退することのない着実な第一歩である
という実感を、水俣に集まった人々のや
さしく、深いまなざしに、固く握られた
手の温かみに、そして自らをかけた敵し
い討論の姿に感じることが出来る。
世界の四割、二億の先住民達がこの五

百年の歴史を問いなおし、自らの生きる
権利の主張を、大地や海の声として語り
はじめた。

農民が農産物の生産者、販売者として
ではなく、土と対話する百姓として声を
あげることによって、アジアの、そして
世界の百姓との連帯がはじまった。

労働者が自らの賃金や労働条件を視点
におくのではなく、人間同士の連帯を基礎
に、労働を問いはじめた。

世界の半分を占める女性が自らの自立
の上に、世界の歴史の本質的誤りを鋭く
告発し、不平等、不公正な社会のありよ
うを正す道を一歩ずつ歩み始めた。

産業革命以来、開発や発展がただただ
善とされてきた歴史は、水俣で、ポパー
ルで、チェルノブイリで、そして世界中
でくつがえされ、その最も苛烈な犠牲者
達が未来へむけた連合への道を模索しは
じめた。

そして、それらは一つ一つばらばらで
はなく、それぞれが結びあう問題であり、
共同の中で、より豊かな、新しい人間と

して生まれかわることによって、
社会を築いていくのだという確かな連帯
感を水俣会議は獲得した。

日本のありようを問う

確かに、今現実の社会は巨大な国家、
軍隊として、多国籍企業の支配構図の中
にある。しかも、それらを構成する一人
一人の人間存在は、がんじがらめのこと
く、金と権力によって、からめとられて
いる。

日本の社会のあり様を鋭く問いかけた
アジアの人々の声も未だ、日本人の大多
数に届いてはいない。アジアでくり返さ
れる戦争、飢餓、貧困、売春、公害等そ
れらが日本の社会と、そして私達自身の
暮らしとどのように関連しているのかを
問う日本人はわずかである。

しかし、そのような繁栄が長く続くは
ずがないことは、まさに歴史的事実であ
り、腐敗、犯罪、病いの蔓延はその崩壊
の予兆をあらわにしている。
侵略と略奪、破壊の文明の崩壊を前に



たに・よういち氏

一九四八年生、一
九七一年鹿児島大
学中退、水俣病患
者支援のため、水俣に移住、一九八四年ア
ジアと水俣を結ぶ会結成に参加、一九八六
年五月アジア民衆環境会議(水俣にて)イ
ンドネシア、ジャカルタ湾の重金属汚染、
インド・ポパールの農業工場事故、韓国、
温山の公害事件などベトナム・枯葉剤被害
調査、救援活動などに参加。